

氏名	カワ ナ ノリ アキ 川 名 倫 明
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第322号
学位授与年月日	平成23年3月25日
学位論文等題目	〈作品〉夜行 〈論文〉異界と境界－絵画表現における非日常性－
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 教授（美術学部） 手塚雄二
（論文第1副査）	〃 〃（ 〃 ） 田口榮一
（作品第1副査）	〃 〃（ 〃 ） 吉村誠司
（副査）	〃 〃（ 〃 ） 梅原幸雄

（論文内容の要旨）

かつて日本人にとって自然とは、日常生活に欠かす事のできない様々な恩恵を与えてくれる存在である一方で、不可解な謎や怪異に満ちた「異界」の象徴でもあった。森林や河川、地下や海原を、日常と非日常とを隔てる「境界」とみなし、人々は無闇にそこへ立ち入ることを恐れていた。

古代の自然信仰とはまさに自然の神格化である。人間の抱える死の問題や自然界の現象そのものにも様々なかたちや名前が与えられた。その中には時の流れとともに、神からあぶれてしまったもの、すなわち妖怪化したようなものたちも含まれるだろう。「境界」は複雑に張り巡らされ変容を繰り返すが、文明の発達と共に、「異界」は徐々にその領域を狭めていく。これまで信仰の対象として崇拝、あるいは畏怖されてきた自然や動植物の神性や魔性が徐々に剥奪されてきたからである。「異界」の正体が解明されていったとき、それらは逆流してもとの自然に帰るのが理であろう。しかし、日常と非日常との「境界」は、曖昧さを増していきながらも我々の記憶の中に連綿と留まり続けているのではないかと私は考える。

私は「異界」と「境界」という概念を念頭に置いて、作品を制作している。これらの言葉は周知のように、特に民俗学研究において頻繁に使用されている。私にとって「異界」とは、日常とは異なる空間、つまり、多元的な世界観をあらわすための異なる視界を意味している。また「境界」とは、土地の境目をあらわす他にも、生と死、聖と俗といった様々なものを想起させる言葉である。それらは、私の考える絵画表現における死生観という美意識と何か密接な繋がりを持っているのではないかと私は考えた。私はそうした自問から作品を制作する根拠を見出した。

本論文の構成は次のようになっている。

第一章 「源氏物語絵巻」にみる死生観と境界

私は、徳川美術館所蔵の国宝「源氏物語絵巻」の現状模写研究を通して、平安時代の文学における調和的情趣が絵画表現の中にも同様に描かれており、根底にある流転する死生観と密接に関わっている事を再認識するとともに、内と外とを隔てる多元的な画面構成が及ぼす絵画的な効果にも着目した。国宝「源氏物語絵巻」にみられる吹き抜き屋台という表現方法、また、几帳や御簾などの道具によって空間を隔てる画面構成は、私の研究制作のテーマである「境界」の表象に新たな視点を示した。

第二章 変容する異界

人間と自然との関係によって形成されてきた「境界」の本質を中心として、その曖昧性にも迫ってい

く。“人間の作り出した道具もまた、自然の代替品である”という澁澤龍彦の論考を例に挙げ、自然信仰の観点から考察を深めていくことで、「境界」という概念の可動域を自己の作品の中でさらに広げていけるのではないかと仮定する。

第三章 絵画表現にみる境界の表象

死生観は、これまで多くの作家たちが繰り返し取り上げてきたように、人間にとって普遍のテーマであるといえるだろう。「異界」、「境界」の観点から、私が影響を受けた国外の作家の作品に触れ、私の考える死生観との繋がりについて考察していく。また、これらの作品が、自己の制作にどのような影響を与えたのかを具体的に述べていく。

第四章 作 品

本章では、自己の作品を振り返りながら、私の考える「異界」と「境界」との関わりについて述べていく。相反する世界が行き違い重なり合うところに必ず「境界」は存在している。「境界」ないしその周縁には、多義的な意味が溢れている。「境界」の持つ多義にわたる両義性を述べることと、「境界」の帯びる曖昧性について述べることは表裏一体である。

「異界」の境界線上では相反する内外の世界が混ざり合い、互いに触発しあう。これは、「人間と自然が混在し、共存する世界」を表象しているのだと、私は考える。

(博士論文審査結果の要旨)

申請者は、日常とは異なる空間、多元的な世界観をあらわすための異なる視野を意味する「異界」と、日常と非日常を隔てる「境界」について様々な視点から論じ、「異界」の境界線上では、内と外、生と死、聖と俗など相反する世界が曖昧な形で混ざり合い触発し合う、そこそが「人間と自然が混在し、共存する世界」であると結論付け、そうした「境界」の表象を自己の作品の中においても追求しようとする真摯な学生である。

本論文では、《源氏物語絵巻》現状模写研究を通して、そこにみられる寝殿造りの内部空間を仕切る「境界」としての几帳や御簾によって日常的な営みの中に際立たされた非日常性、すなわち死を読み取るなど、絵画表現における生死観を「異界」「境界」の観点から考察し、死にまつわる自己の体験、ヤン・トローップとグスタフ・クリムトの作品の比較検証などにより深め、また“人間が作り出した道具もまた自然の代替品である”との考えから道具が果たす「境界」としての役割などにまで論を拡げている。

論述の内容は申請者の絶えざる自問と幅広くレベルの高い読書体験のうえに、自らの思考を様々に綴りつつ深めていったもので、論の展開に一部やや明快さを欠くものの、作品制作の実践をともなう優れた論考として高く評価される。

(作品審査結果の要旨)

川名君の作品「夜行」162.0×388.0cmは画面全体が薄暗い色調で支配される。左側の人物周辺部分を明るくすることで作品に「暗」と対となる「明」のリズムが加わり、不安と閉塞感を与えながら囲まれた明るさに安心感を覚え、鑑賞者が作品に引き込まれる。

また作品には様々な動物、人物、風景、が登場していくもののシーンが連続し重なり展開し、鑑賞者に対して具体的なものを説明するというよりもむしろ自分の中の世界感で完結させた秀作である。なぜならば川名君が言うように、制作する作品世界や人物表現には、イタリア人映画監督のフェデリコ・フェリーニの連鎖的な状況展開、物語の論理、娯楽、様々な複線をも破壊する退廃的、かつ叙情的な世界が

底辺にあることがうかがえる。それを強く意識することで異様な空間と構成が絡み合い個性となってオリジナルの中核となし得たと言えるだろう。

作品、「カエル」、「幽明」などは暗鬱な画面の中に人物以外に動物を画面に採り入れることで、静寂の中に不気味さと異様な空気感を作り上げることに成功している。また作品「夜行」、「辻」では動物の他に人物を組み合わせることで、画面に奥行きを表し動物と人物での相対感を表すことで作品世界に複雑な広がりを持たせた。

しかし作品「二人遊戯」、「聴く」、「ふたり」などの人物だけで表されている絵画表現では、画面からは叙情感や退廃的な感じは伝わらず、逆に表現として今一つ物足りないのも確かである。

各作品とも細部まで神経が入り完成度は高く、非常に好感が持てる。また、構成の基礎となる素描を数多く行い、独自の技術の研究と集中力は高く評価できる。ただ描いている肝心な人物表現に、今まで以上に一層深みや、情感が表出させることに努力を費やすことが、今後における課題となるであろう。

今後画面から複雑な要素が現れて来ることで、作品の厚みや叙情感がさらに出ることを期待する。

以上の理由により、川名君の将来への希望を込め、2011年 月 日主査である日本画研究教員の 名、及び論文担当第一副査、田口榮一教授と共に審査委員会を行い博士学位授与に値すると判断し合格とした。

(総合審査結果の要旨)

川名君の絵画表現の基盤に死生観という美意識がある。その作画表現は、異界と境界という概念を念頭において制作する事であり、「異界という日常とは異なる空間を、多元的な世界観を持った視界により表現される事である。」としている。そして、二つ以上の異界の存在により、その狭間に出来るものが境界である。それは「土地の境界」等の目に見えてははっきりしたものと、「生と死」・「聖と俗」等のあやふやで目にははっきりと見えない境界とがある。と論じている。

茶の湯の世界でのいわゆる結界もその一つである。彼は大学院の時、源氏物語絵巻を模写する事により、几帳を境界とみだて一つの画面に二つ以上の異界を表現した作風に影響を受けた。几帳により分け隔てられた二つの物語を対比させ、一つの画面で物語絵巻として成り立たせる表現である。そして、その異界と境界を一つの画面に表し、既存の画面分割とは異なった表現を試みようとして制作してきた。その作風にふれてから、日常的な題材を描く時、「綺麗だけど恐ろしい」・「可愛いけど野性的」である等、相対関係にあり対立的な要素が触発しあい曖昧な境界線上で共存しているような作品を制作したのである。それにより彼の絵は、彼の心を感じる事の出来る個性を持った作品へと生まれ変わった。

ある意味、絵画の世界は全て異界である。今までにも異界どうしを画面にぶつけ合う手法は沢山あった。しかし、彼の作品には異界どうしをさりげなく繋げ、異なった二つの異界がどう絡み合っているのかわかりにくい作品に仕上げている。それが彼の言う処の「ぼやけた境界を表現する」という事である。死生観を基に二つ以上の異界を組み合わせた彼の作品群には、「夜行」・「幽明」・「長い夜」等、どの作品にも夜をイメージしている作品が多い。彼の言う死生観が発想の原点になっている為と思われるが、死生観という抽象的な言語に対して、具体的な形態で表現されたものが多すぎる感もある。具体的な描写により、異なった世界を描き、両立させる表現は死生観という幻想的な世界を表現しきれているとはいえない。しかし、人間と自然が混在し、共存する世界を追求している姿勢からは、異界の表現を探っている様を感じることが出来、着実に内容を深めている。絵画を勉強するという事は、偏った見方や表現をするのではなく、観察し描写する事と創作する事という、相反する事柄を両立させ、いかにバランスをとるのかを考える事にあると思う。博士として「勉強する」ということに関して言えば、物を考え、人生を考え、自分なりの作品を築こうとした努力が実り一つの成果をあげたのではないかと思う。作品数も多く、意欲的な制作態度は博士課程において十分な取り組みであり、論文による整合性を充たしているとし、審査員全員による評価として合格に値する。